【＊】　院政時代を鎌倉幕府の成立より重視する理由は何か？

院政時代を中世の始まりとするのは、院政時代に成立した社会システムが基本的に応仁の乱まで続くからだ。荘園制（荘園公領制）社会の成立。年貢と公事、そして一国平均役（段銭）という負担体系。大田文の作成や大番役の編成などがそれである。

【＊】時代区分へのこだわりは必要か？

実際のところ、近年の研究者は時代区分論に対する関心を失っている。時代区分論はほぼ１９７０年代で終焉したといえるだろう。そして私が法然･親鸞の思想史研究へと向かったのは、７０年代の時代区分論に関心がもてなかったからだ。

しかし、時代区分論へのこだわりを棄てたとき、古典的な時代区分論がそのまま幽霊のように存続する危険性もある。たとえば、「地頭の荘園侵略」。これが教科書に取りあげられたのは、地頭＝中世、荘園領主＝古代という図式がもとになっている。この図式が崩壊すれば、「地頭の荘園侵略」の項目は削除されるべきだ。時代区分へのこだわりを棄てるだけでは、かつての古典的な言説をそのまま無批判に延命させる危険性がありはしないか。

浄土教の発展についても、教科書では大きく取りあげているが、法然・親鸞の思想こそ中世仏教の典型であるという議論が崩壊した今、平安浄土教の発展を取りあげる意味はほとんどない。実際には浄土教は、御霊信仰や方違え、ケガレ観と同じ程度の歴史的意義しかない。

【＊】「武士の時代」でないとすると何の時代か？　平の中世仏教論は現代社会に対してどのようなメッセージをもつのか？

中世＝「武士の時代」　……他の時代もこう言うのか？　古代は？　近代は？

この議論のイデオロギッシュな危うさ

（１）日清日露戦争、中世史家の原勝郎→　清新で質実剛健な幕府･武士と腐敗した京都

ダブルイメージ　　東亜の新興軍事国家日本と腐敗した中国

「清新で質実剛健な」この形容が危ない……武士＝人殺し、暴力団

中世＝「武士の時代」　……近代＝軍国日本の時代　←東亜の盟主へ

（２）石母田領主制論＝中世的世界を切り開いてゆく唯一の歴史的主体＝武士

百姓は歴史的主体たりえず＝武士に協力すべき

武士に抵抗した神人＝人民の裏切り者、きびしい非難

……武士の支配は苛酷　←百姓は武士の支配より荘園領主の支配を望む

（３）鎮護国家と五穀豊穣に膨大な財源を投下　←宗教の迷妄

我々が中世の迷妄を嘲笑＝800 年後の人間は我々の迷妄を嘲笑……未来からの眼差し

民族・国家・マネー

【＊】かつての「鎌倉新仏教論」と比べると、栄西が改革運動に分類されている。その理由は？

臨済宗･五山派は幕府の保護もあり相当繁栄した。しかも「禅律僧」の語が頻出する。この点で、栄西･五山派は真宗･日蓮宗などと性格が大きく異なる。

【＊】神仏習合や寺院と神社との関係について

（１）本地垂迹説(院政期)＝神仏同体論

〔寺院＋鎮守社〕と〔神社＋神宮寺〕　　鶴岡八幡宮寺・石清水八幡宮寺

モンゴル襲来後、伊勢神宮の横に神宮寺（法楽舎、供僧 200 余）、即位灌頂、大嘗祭、 神国＝仏国

殆どの神社の主導権は僧侶に握られる　←神官の不満　→吉田神道の発展の基礎

（２）神仏の異質性……神々の戦争　←読経･祈祷がパワーアップ　　仏は戦わない

靖国神社＝神･神兵として祀られる　←徴兵は解除されていない、戦いの強制

これからも私たち日本を守ってください→　靖国神社へ

戦わなくてもよい。ふるさとに帰れ→　参拝すべきでない、祀らせてはならない

【＊】一遍の踊り念仏も少数派だったのか？

少数派。『一遍上人絵詞』の存在。

一向俊聖も踊り念仏・弥陀号。　　時衆は一遍の没後、性格が大きく変化

陣僧＝戦場で主人に従軍。和歌･連歌、治療、臨終のみとり、埋葬、遺族への連絡

……曹洞宗＝葬式仏教　not 座禅

【＊】「数千人の神人等を補し､巨多の講衆を定めて」の出典は？

保元新制。地域の特定はせず。地方での一般的普遍的現象としてに語っており、その危機感は強い。

【＊】僧侶教育はディベートの訓練。各宗派に分かれる以前に、皆同じ出発点に立っていたのでは？

そうだ。討論の訓練が『選択集』などの著作の基礎。「朝まで生テレビ」のように、各宗派の代表者による討論を、貴族が聞いて楽しむ時代だった。そのため、天皇･貴族も討論の出来に対する批評は鋭い。

【＊】頼朝が建立した旧仏教の３寺院が存在しなくなったのは、鎌倉中期以降の禅律僧の活躍に原因？

（１）近年の禅律僧研究はやや過剰評価だ。将軍･北条氏の子弟＝旧仏教へ　　御家人の子弟＝禅律へ

（２）室町時代でも鎌倉公方の縁者が勝長寿院別当。正月参賀の分析。宗教界で最も重視。衰退は戦国時代。鶴岡八幡宮の神社化は近代

【＊】悪人正機説について

阿弥陀仏の救済対象は聖人君主ではなく、普通の凡夫を救済の中心とするという考えは、中国浄土教以来の伝統的普遍的な考え。親鸞の独創ではない。「悪人」の概念は多義的だが、少なくとも親鸞は「悪人」を「悪い人」の意で用いたことはない。